



三十一集



續猿蓑集卷之上

七年、夏伊賀の東麓菴として伊勢より箭の檜をりあ
撰ありと○有節日前後の鏡いつれこの日まらまを
知らん

八九間空まらる 柳 色蕉

まのあしすの白由はるまはる 沽圃

初春とるまらるのみのお鏡きて 馬首元

内いさふつく 暁のあまもひ 軍圃

まのあしすの白由はるまはる 沽圃

まのあしすの白由はるまはる 沽圃

まのあしすの白由はるまはる 沽圃

前乃のこえの山師とてはきつかけりこゝろのちかきみりや

月待子侍 月待子侍 ちかき流のころきりひ **見**

日待月待のちかきつにおろのちかきの用こころよめの一字をとりて新婦の
あつしこころよめこころまはれし

花離のり菊のちかきり **里**

前乃のちかきつこのちかき園をえめくつて力待せのちかき園のちかきの
ころきりえめくつてちかきつたこ

ちかきつちかきつ ちかきつ ちかきつ **詰**

つたつちかきのちかきつ

伴信 伴信 ちかきつ **蕉**

ちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつ
ちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつ

削 削 ちかきつ **里**

ちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつ
ちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつ

ちかきつちかきつ **見**

川 川 ちかきつ **蕉**

ちかきつ **詰**

花 花 ちかきつ **見**

前乃のちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつ
ちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつ

瀬 瀬 ちかきつ **里**

ちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつ
ちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつちかきつ

俵米も志ありて重き花散り

沽

前人の徳をのあたし前々の人より乱れぬ米あるまうつくともよこころに
花の望しして一らのあるりし

志辭 みる竿の海 鱸

里

花登の坊つりて前々の庭前の花をえし

首の道より海を掃残し

覓

時候かぬたやうあぬをさあふたしし雪の前々の舟を景色よみ

志あぬ合点を始りてみる

沽

あふしのやうな事さえる人より前々の事を始りてみるありあつてし

年々の庭よりものにはあふく

里

前々の人の事をしもの命長しといふ各代をえしつりし

三崎 敦が受のいぬのかきむし

覓

前々の人の事をしもの命長しといふ各代をえしつりし
よつて年あふししこと

汁のまじりしはる茶子のおあつて

沽

前々の間をみるゝして大勢の人ぬひは料理しするりあつてしつりて
居たあこの寺の前のいさしりて都立のいさしりて

あかしのまをえしつりし

里

時侯のつりて前々のいさしりて都立のいさしりて

口々の寺の坊園をみる直

覓

何れもまをえしつりし

庭のあきの海にさしりし

沽

前々の寺の庭にまをえしつりし

銭りりてまたあつてみる

里

何れも庭にまをえしつりし

田平の庭よりみる

覓

前々の人の事をしつりし

手打煙くふ中身の味い

馴入て秋なるあしるる雪の月

法

静なるるも世の静

里

前よりさしつかへなくあつたはるる雪の味い

けちの實の母のあつて

覓

在所の静の味いあつたはるる雪の味い

有るる行の羽の羽内

法

前よりさしつかへなくあつたはるる雪の味い

直のあつた帷子時のまらひ

里

前よりさしつかへなくあつたはるる雪の味い

聞てまはるる杉苗の風

覓

帷子時のまらひあつたはるる雪の味い

花のかけのあつたはるる雪の味い

法

前よりさしつかへなくあつたはるる雪の味い

あつたはるる雪の味い

里

前よりさしつかへなくあつたはるる雪の味い

あつたはるる雪の味い

前よりさしつかへなくあつたはるる雪の味い

あつたはるる雪の味い

前よりさしつかへなくあつたはるる雪の味い

あつたはるる雪の味い

前よりさしつかへなくあつたはるる雪の味い

所切子有見の垣の集あめ銭 沽

前々の田舎の事まけうらなふりう金を又そをいり
有りちいしとちも馬次 里

前々の町のさしきは
智恩院の程うの程 極うて 蒐

前々の荷只の荷まいてをうしゆれまを向と頃のつあつし
さくらの後 楓若やく 沽

替うしりし時假のうり行を極向と下ふか名居あふぬい
組の橋子あをわけぬし 里

前々の時假のゆに前々の外体そそやうたる内のまや
目利の家いんし 蒐

前々の家つ位を定かこころス、キあまの形假て兵人し
目利了てこたえし
はあひ合すし

状案を駿河の心持法ありて 沽

前々の鑑奇家へ使のものこころに心持その家のうらなを
またせりふあぬ日の影 里

前々の心持の心まじしまた口めし
羊のあふまぬみのあの流れちきり 蒐

前々の場なるまかづつ体こころにありしとて日あ
伊駒まじし綿との雨 沽

大和の伊駒山まきうらぬぬらあふはんとまじし
後とてまじし降こころをまきふし
ふんいこま山ゆえか
花の林こころぬらし
秋の雫やふし
里

うき旅の賜とつま立海の鳥 里

伊勢の事をいふに鳥をうけてくるをまはるる一白の他

有明きり明きり空 覓

前りの海鳥を籠中して空のルキキキつけし

紫本の花の中よりほつて 沽

前りの坊と湖をまわりのうらやま

柳の傍へ門を多くし 里

湖のえをいしあやうきおまゆりの家やめんとわらういひうたう

百姓あうてせるともいふよ 覓

前りを有徳する百姓とてつけし

こまめを膳のあめ片葉 沽

百姓のうへまつけたる本をまわりのうらやまをまわりのうらやま

漬物の漬紙つこおらし 里

前りを合ものうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

ふしのあやうきいそがうらやま 覓

借紙をいそがうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

砂を這ふ棘の中結糸のま 沽

あつきのまはるるあつきのまはるるあつきのまはるるあつきのま

別をくこのいひかをいふ 里

前りのギスのまはるるあつきのまはるるあつきのまはるるあつきのま

火煙の火つけてけつるま 覓

前りをぬらしてつけし

一石ふりし 酢のま 沽

前りをぬらしてつけし

お実目の起る天のま 里

うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

仰よ加減のちうらやま 覓

前月の書目「おきくうのあまのこ」

月影のこしあきと吸くさる

沽

おきくうのあまのこ

あきと吸くさる

里

そなたのこゝろはくは境界のうしろを指す

月影のこしあきと吸くさる

覓

前月の書目「おきくうのあまのこ」

あきと吸くさる

沽

前月の書目「おきくうのあまのこ」

あきと吸くさる

里

長江の前の時辰ついでにうら二の月影のこしあきと吸くさる

あきと吸くさる

覓

前月の書目「おきくうのあまのこ」

あきと吸くさる

沽

おきくうのあまのこ

あきと吸くさる

里

あきと吸くさる

あきと吸くさる

沽圃

あきと吸くさる

あきと吸くさる

園 芭蕉

あきと吸くさる

あきと吸くさる

支考

あきと吸くさる

土

つるまき

竹條竹まき

推然

前より

雞のあし

蕉

前より

道

考

前より

魚

然

前より

蕉

蕉

前より

語

考

前より

中國より

然

朔日の日

蕉

中國の用

蕉

考

蕉

蕉

蕉

蕉

蕉

蕉

考

赤陰光る溪の小瀨 然

流るる水の音のこゝろの静けさのついで
見ても通る 紀三井ハ花の咲かり 蕉

小瀨川ハ秋ハ月こそさゆゆの月のやうなあるものありき
たりの前を流るる水の音のこゝろの静けさのついで
さゆゆのこゝろの静けさのついで

春物いづりよ 永き日 考

前より旅くちをて 吾用をせたり
こち風の又西もゆる北もゆる 然

永き日よありきついで
まづふの脈を大事かゝる 蕉

前より角についで 脈のまをせり
清浄の内儀の交るる 考

前より人の心も 脈のまをせり
脈のまをせり

内界のまをせり

脈のまをせり 然

あの人へ志すは 内界の脈を 例のあやしく 脈のまをせり

大せつふ自ら二りあり 鐘 蕉

大せつふ自ら二りあり 鐘のまをせり

雪かきまけ 中 のついで 考

こゝ大せつふ自ら二りあり 鐘のまをせり

前りの流るる水 脈のまをせり
南栗の世を 世を 蕉

このお家流は 田舎の世を 世を 考

頃つ片にたゞし... 道中... 山... 高

山が... 高

前々の情の用... 山... 高

取... 然

石川く人... 考

考

前々の里の人... 考

考

前々の人... 考

考

前々の指字... 考

考

前々の田... 考

秋風... 志

前々の雨... 考

馬... 高

前々の所... 考

考

前々の後... 考

考

前々の人... 考

高

前々の情... 考

考

前々の人... 考

考

いそいで思ひのつらきとてかくちうたの難きをかきりて却り

角以ぬし人のかしらや花の友 丈艸

若ものつらきとて其の心を老懐をさるる心いし春色充滿多し

花ちりて竹見る朝のやささび 酒堂

花のちりて竹のあはれとて其の心を老懐をさるる心いし春色充滿多し

若きちる酒屋にあそびて文書この

凡音も碎のまきよの思ひおぼるる子

酒部ゆき現今の音さよ志の花 惟岳

うさわくのいそおあし一忘の花をさるる子

賭りて降おさぬささる將 支考

かきものまきよの思ひおぼるる子

人のまきよかく空親の初さくら 沾徳

咲花のふつりの切さる心おぼるる子

くもる日や野中の花の北 西 猿雛

南枝のいそおあし一忘の花をさるる子

七つどり花見えおぼるる子 陽和

花見んとせりおぼるる子

見らる酒屋のあそびて文書この 乙州

待得いそおあし一忘の花をさるる子

咲花とあつりしけさる老木が 本節

かく老木あつりしけさる老木が

我なやあつりしけさる老木が 沾荷

我座あつりしけさる老木が

二の膳やさくら次は調の白鼻 子珊

其坊その付の即奥さるる子

花のついでに...

箕生のもかまひら〜カ〜りび 卓袋

冬の中熱〜ころこの也も陽気なほそつておたけり〜その南方よりい

田家

甘藷甘弱の各物とらん 山十石 李由

元まやくい決白う〜すし美酒嘉音の賦い〜ふく節限を字うて凡流

笑あがる花や吸来五十石 桃首

か〜り〜程がなあ〜し〜り〜も花のほ〜陽まよ〜や〜さ〜ぬて五石と

山門の花ものし 木のあさり 一桐

い〜あ〜ま〜太まう山門は木本のす〜ら〜はま〜けり〜たるさ〜は〜ゆ〜あ〜か〜

あ〜れ〜木の根やあ〜いり〜花の流 如雪

花の流るあ〜れ〜木あ〜う〜り〜さ〜へ〜時〜常〜う〜ぬてあ〜あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜根や

花はまをま〜せて 似合ん人誰 具角

花見多〜ま〜あ〜あ〜ら〜ら〜凡流の遊び〜た〜れ〜ま〜も〜と〜と〜を〜ゆ〜る〜と〜こ〜ら〜

も〜れ〜や〜の〜ま〜な〜直〜れ〜花の春 一踏

一〜月〜め〜く〜九〜ころ〜ぬ〜ち〜一〜口〜陽〜春の慶賀を〜こ〜や〜こ〜い

め〜す〜直〜れ〜石の志ありや 郭の花 卓袋

め〜す〜ま〜した〜ま〜な〜ま〜う〜ら〜う〜ま〜の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜花のほ〜あ〜る〜ま〜

一日の花見のあ〜や 具那寺 沾圃

俗塵を〜あ〜ぬ〜ら〜る〜善〜根〜ま〜え〜花見ん〜を〜い〜た〜ゆ〜め〜

八重の梅あ〜り〜程もま〜あ〜茶花 全

ま〜世〜茶の〜あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜花の十〜れ〜し〜真色ま〜ま〜や〜の〜あ〜ら〜ら〜ら〜

若菜

深湯 湯や甘部こるる土あうり 嵐雪

名木の 鳴止む 岨の若草 曲翠

集の浪身之春色 僅して岨の若菜の生るころ 鳴止む之岨をきき
イヒヤニツキヤトあり 字の堂は石敷土也トアリ 爰のハソバトよき山
の旁に多しハカタハハ片暖まぢへ

夕波の ぬよきこゆるまづまが 孤産

夕波のぬい 静波のぬい こそこへまづ ちかき音のあまきやの 玉のへたが
こうも 静りまぢへ

一うふの 牡丹の ささき 尾頭

牡丹の 富貴樹とよとよも 一株のさしけいふみより一畝んの地子
よのさしけいなるハヨリ

梅 沿柳

春もや、さき色とのふ月と梅 芭蕉

まきやういん 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに
まきやういん 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに

まきやういん 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに

梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに

守梅の あそひ 其角

梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに 梅のついでに

甲の 坊の 確き 梅の花 昌房

坊の坊間の坊まて 町とついでに 梅の花の坊に 田舎の坊に

投入や 梅の およ 良品

取金そのらに 鈴あついでに 鈴あついでに

病偈の なる 梅の さかり 曾良

やいさあついでに 梅のさかり 梅のさかり 梅のさかり 梅のさかり

あけし 梅の花 万字

瓜冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 知月

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 芭蕉

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 去来

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 洒堂

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 傘下

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 長虹

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 野童

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 少年 峯嵐

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 離の櫃 槐市

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 河瓢

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 釣竿

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん

冬より上りて地辺を見たり九に寄るうまきこゆるまてはまを色ぢやん 芳野 西河の瀧

千代の田をかへりて難波人 一鹭

難波人一日千代の田をかへりて己の業をさるるをかしありふ人哉予し
桃 附 椿

白栂や志つくとるに水の色 桃隣

金柑にまた盛るる栂の花 舟我

金柑のさめ新あま子栂うささたつとをれ日さつあやをわらさけさ
伏見うらし甘菜種の上の栂の花 雪止

とこの花に何ぬてをさつとつとくんのさあ種うう(ここは見らあをさ
春色のつらさとりて) 梅さくらの中をわらまん栂の花 水鷗

花さそふ栂や歌新妓の眼 其角

すて奇新妓の眼はつとくしとまじりやして栂さくらりの歌をあらはし
浪の字に田舎の宿服あこりあうことしはとをさぬら花ひらへをさる栂
のやうしやとこ△世に白歌新妓の眼あらはし三番叟と席草布のしりかぬる
一寸おとろをゆを栂がとろしつとわや栂は栂の三番トさくら栂らま
わささくゆへりさあしつとひらあはるるの

江東の李由々祖父の懐旧の法事よあのく

径文題のゆの旬子孫陀の光明とよるるを

小腰紗子光をやと玉つとまき 角上

孫陀の光明を玉つとまきとてせれをわ小腰紗子とせたり
穂ハ栂て甚ま子花咲へもまき 残香

其言 桐本にほとふさのまをいふか栂ハ栂かあもものあひり
一取あけてるまや椿のほその兒 洞本

椿ハ栂らよもろまのあひをさつとこりぬたるるをさつとて
ちりく椿あまももろまの子栂てからる 野坡

夕まかしのほろみ

秋夕

附 躰 躰 藤

山吹や垣の干ばり長一重 園指

田家のすまこ水田をいそいでふくまをまき

田家の人の對して

山吹もすまの冬魚の鱗あすれ 酒堂

奈い田家のまつりこそをまきぬこもてまのいばや在たおぼへりか。いぬ山吹もすまの冬魚の鱗あすれ。いそいでふくまをまき。いそいでふくまをまき。いそいでふくまをまき。

堀おこぼつしの様や帳のより 雪北之

りまのほろみ

萩の咲や積まのそとく藤の花 荊口

積まのそとく藤の花。萩の咲や積まのそとく藤の花。萩の咲や積まのそとく藤の花。

春月

山の端をちりちり白くするの月 長崎 魯町

夕まかしのほろみ

春雨

物もすまの春の雨 荊口

早まのほろみ

新し調子をゆる春の鳥 乃龍

夕まかしのほろみ

春の鳥や春の鳥 乃龍

夕まかしのほろみ

春の鳥や春の鳥 乃龍

春雨や花のりりい木 支考

秋雨のまのつがさうたいをまき。秋雨のまのつがさうたいをまき。秋雨のまのつがさうたいをまき。

もろあや光るるうらぶに 桃首

淡雪や油を近するところの星 風麦

行つたや蛙の尻を石の直 風騷

のゆく帆の淡海を飛ぶみ沙干 去来

品川よ富士のかけまき 沙干 閑指

山けしやあゆむる春加帳 許六

夕もとらさかきさかき 夕

若草やまなす 桐の苗 凡睡

黒いこの松のそまのりや若草 土芳

かたろつやや巖み標の掛ちうら 配力

小糸花を長のはつみや 万字

聲身毎に 荇藻

木の芽多つ 均水

春の月や 正秀

小室ふくし元禄の頃うやちん少唄の若く近松氏の作まる丹波を心
よきのこををつくまうたこの又一九うか親いやくり毛三編のそしき生

春の旅人馬の跡をたづねて
今昔の馬の山室ふりゆた
こゝろ宿坊人馬野跡を
尋ねて今昔の馬の山室ふりゆた

三月末

腫夜を去り酒うりの名残が 支考

春のつらさのなほはらうり
名残を懐かしくいひが
あつた

歳旦

着水やまのうつくしき啓水 カ 武仙

のまきりまのうつくし

蓬乃ハ年のかすみのまはら 百 歳

蓬乃ハ廊のやまの何れも
何れも何れも何れも何れも
何れも何れも何れも何れも

書や雑者まのその聖つき 尚白

のまきりまのうつくし

蓬乃の思ふついでハ 蝶の思 圃菖

母方の級めついでハ 始 山蜂

つらさのなほはらうり

詩よつへる衣裳を顛倒すといふ

幸を老又の文は書紙 信ふハ

元日や淑うき衣のうら表 千川

此の注あり句佛日衣をわへして
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

人ともめまきや鏡のうらの梅 芭蕉

大江丸うそいかに信よりハ
信よりハ信よりハ信よりハ
信よりハ信よりハ信よりハ

碁の家の筆植かん帰る / 春箴
かけろふをんたるやものくまきねと 箕下
うけろふや子浪月のくもる日と 楚常
ふあきれて蛇の毒をい行書と 桃葉
葉の崎の渡家まで

玉すきや胡葱菘 浦小鞆 牧笛
君いくら我もやはくく 五七本 李東
頭陀袋うちぬきえら 土筆水 復之
春の池も袂も袖もつくし 知字
七くさ子あつてさかしのや鼓草 何處

多んりや芥生かぶのまかい 牧童
草もえて土のぬろつく 地法水 不的
くすの芽のうへ子子をく 延のふ 和之
あつじまの人のまつらん 猫のつま 女
ふをあげてうねきぬ 猫のまこふ 智月
曙やこも子 枕花の鶉のや声 其角
あつかふまきまやましるむの花 雨色
いとつ家の枕を砂たの さまのつら 破靴
雨降てつまきぬる 本蓮花 言落
秋の坊の申状

遍照の叢さへもたしむるのる 牧童
 まさめやさいしきやうて梅柳 漁川
 もるまそハ鹿も志ふし春の雨 雨色
 まる雨や本のおれとる下霰 子部 霰白
 また鳴る曉色の江の蛙 一笑
 鳴出たみふよくや田の蛙 子部 狐舟
 うちかへしきよもぬ津戸の蛙 子部 字路
 笹の家のいくさや宮ふふく蛙 流志
 以上三十句

夏之部

郭公

噴 アミレ や 電をさそふや写塊 具角

時鳥一声拂曉の空をいもふしころんきき多くへ

時鳥 啼や湖水のさし 瀉 大村

一声さつとまらたうは湖上より波あつてきこむころんきき

志 アミレ 瀉や何きあけけし 時鳥 曾良

時鳥いよく又へはあらやつじやの志はほや何をあひかきくころんきき

写塊 写ぬ如白し 朝熊山 支考

夜ふくしへ朝熊山をあけくころんきき又お白しとあやそあしけり待
時鳥のルきころんきき

鳴滝のたふやさうあふゆるきた 如雪

鳴滝へ鳴りあがりて金所を以て跡としき時鳥はひびく川へ啼く何ゆへ
しやあれハ鳴りあがりて金所を以て跡としき時鳥はひびく川へ啼く何ゆへ

燕好み好くも空や郭公 芦本

此句廿五条のハ兼用場としてすべしつかさま兼用をやめん十ては
の廿五条といへるも支考の依化とよ説あり

淡くも塀田子あけりし 時鳥

淡く時鳥の名所あるを以て石山の麓に於てかろき名所をこぞ時
鳥とあけりしと辨ひたり

紫石山の麓を以て禮のつとて過るるや

郭公よりさの木の枝や中やとら 沽圃

かさいの森つこの名所をよやあはれん志士にりまにんよそ時鳥をゆはれいとの
しやこのかさいの森はやとらとよとらん詩ありしてまこのもやとら

木 附草花

橙や日よこ加ぬたる夏本立 園指

橙の赤くと志士は夏の日よこ加ぬたるやあはれん

里くの次女うりぬ夏本立 野秋

夏本立の坊主してまこぞよあそと浮きまここへしはるるふる
うへるこ二段のよとらしきまここは行あり

園中 二句

山中の古木ハツつき柳の花 此筋

柳ハ鉄くえゆるものこ古木ハツつきとらつて柳の葉ををたらしめ
しやあそとあそとあそとあそとあそとあそと

年切の老木も柳の若葉あそ 千川

ことしをかり花実を結んりあひりあそと老木も若葉あそと
あそとあそとあそとあそとあそとあそと

雌百合やさくさかちの系 素龍

雌ゆりの美しき百合はさけるよまよくさけるあそとあそとあそとあそと
題山家之百合

志々雲や垣根をほる百合花 支考

色を抜向より白雲の如き花よりして山家と云ふをさしてあくとゆりのほねりとあやをあらはせり

山もえ子の如く咲や 杜若 尾頭

杜若本字馬蔺之杜若子水辺をよめる中一葉りのもの如くして山前のとき水首の杜若事もあるといふは、昔の杜若と云ふは、今と異なる

冷汁いひすまゝ 杜若 沾圃

庭前の杜若十こたれは、時候を考へて其家の侍

ふのそく水邊をきし 杜若 宇多都

夕まがくはちあふ 実をこつてつらつらぬそよ

夏葉や茄子の花は先へさく 拙候

園中の菫もてさせりとのあけきと詠るもの、待心ゆへのほくほくと

たき浅庵の即奥

春の日は日をもれも花成 沾圃

是る事をしてちりの外のあはさまをいそんとて、世の晴あまか

夕顔や破てりぬ花の元 芭蕉

夕顔の元の元は、ちりの破てりぬ花の元、ちりの破てりぬ花の元

夕顔や福をかきて夜半色 畷蘭

これ七歳へかけは、ちりの元は、ちりの元、ちりの元、ちりの元

薄の花をちみよをける入江 残香

夕まがくはちあふ 実をこつてつらつらぬそよ

菫の花は水の濁り 氷筋

かちまがくはちあふ 実をこつてつらつらぬそよ

蓮のちやんもあま 水離き 白雪

一茎をたしあくおせしてあふ

空あらし ともよ 蓮の種あま 良品

前日あふ〜〜〜妙き〜〜〜
生 碎を福りし〜あれる 涼水 雪草
たにちのふあちちちちち

そそ涼水を芽為すまはて

涼水をあましくはなすのこりきん 游刀

此人多賤を清めて居させたり〜
ふれさ〜いさあ〜かしらや

いそがしき申さぬけたるす〜ん 全

其れを安んじて常より閑静〜〜
〜〜中より涼む〜一入す〜

まあり〜人のまきぬ〜 涼水 去来

別は涼〜の書をも〜けて涼する〜
涼〜や〜

黙礼はあまら涼水石の上 正秀

りた〜〜〜
職人の惟るま〜なる

又す〜 土芽

職人の〜の〜を〜も〜
か〜い〜も〜ち〜す〜

涼〜十や一守羽織の風はす 我眉

〜も〜た〜の〜の〜
〜〜

涼水やむらいの敷は力くさけ 里圃

涼水のあ〜〜
〜〜

盛夏

か〜〜〜や照つ〜
庭の隅 野萩

庭中露あ〜照つ〜
い〜日者〜の〜
訓義解 酢漿草首の花は五月、部あり、注片葉三〇つ、あるゆへに

ふまゝの我うちりや園のけふと獲 葦粟

夕陽の影のあつちや海とや 水鷗

夕陽の影のあつちや海とや 水鷗

魚あふる草もあれ 浩うちり也 馬莧

梅あまや竹爪かむく日の雨 重羽卒

沢澤や及竹のゆるる雨のあは 野産

蟹牛一つの引夜のそとあき水 水鷗

こまのあつちりも目をそくさるるさのそりしこころは梅のこの角
もてようつらんきしたるすうもさう

晋の洞明をうらやむ

忘形子春社の日星や 箏 芭蕉

古文前集陶淵明か真つ字ス回謝幼盤、七言古風七言上下略一樽徑々、
み、醉テ北窓ニ臥ス蕭然トメ自譚カミテ、義皇ノ人ト興心ヲ思ヒカテ、
かゝる場かあき思サセハハかの陶淵明一もいさけん、まて念念志
の境泉の羨ましいとサす、うは在州の上りうら世のあかりしつ、この
ぬねる日用のちささまあひらりし

粘おりのみ 唯子かふる春社也 惟悲

分る僧のくるしみ冬のささやハハやせくすすの
あきよ夏日の納涼ハ扇一むすて世よ交る

唯子の福がいやす 銭五百 支考

前書より白をかくもはるるのみ。唯カモラ秋名子唯田之以自障ヲ田シ
和名加太比良和名州今、夏衣の名とす

秋之部

名月

名月、林原の老木や田のくまり 芭蕉

名月歳時記、仲秋十五夜の月を玩ふこと中ころより和漢のあはれり
民間今日餅をこを削りて食ふ草と社屋とを繋りて月をさくくはるる
の一息し、こまなく晴日ありたり子林、老木田、くまりたりと謝芝多
る、曉地の眺をよみて其をこまなくせんかたあり

名月の花をええて 棉 白田 全

玉島の畑を花とてはかふとも名月の光決をうけてあり名月の徒
そく、綿の花ともはかひあり、こ師の法中子の光りとあるらあり

六とし、伊賀の山中より名月の秋の二

句をわきおして、つれは、是つれは、非あら

んと侍、よ、是は、是の支考、はつ、こ、こ、は、び、り、わ、の

つへ、か、つ、月を侍高根の堂はを、清りあり、こ、ろ

ありへき、初時あり、四位あり、し、
西行之法師
ハホフニ

語、の、た、ち、中、さ、れ、林、原、の、老、木、や、田、の、く、ま、り

て、平、田、淵、く、と、白、雲、り、あ、ら、る、老、杜、り、唯、雲、水、の

み、あ、り、と、つ、へ、る、と、し、か、あ、へ、る、あ、ら、る、池、し、こ、の、次、の

棉、を、あ、け、い、言、葉、葉、葉、し、て、心、を、あ、や、の、あ、り、い、

ハ、今、の、こ、れ、む、さ、の、一、筋、は、便、あ、ら、ん、月、の、か、つ

ら、の、み、や、ハ、あ、る、
古今集もの、名、秋、の、月、の、桂、の、み
ヤハ、あ、る、光、り、を、花、と、ち、と、た、斗、を、

ほろほろと花をまらば斗はあひやりたれ
ハ花は清香あり、月日陰ありて、是は詩歌の
間をぬれぬ志らば前ハ寂寞をむむと
後ハ風真をむむと、吾こころ何ぞ是非
をそあるるのそむむ、後のくふはある

支考評

名月の海より冷る田舎は 酒堂

海よりも田舎のく鳴る風情ありて名月をもちて衣はぬきしとくへきは
冷るといふあやをあしつる冷る情はむを生まるるも高きへ

叻力や西よきまは 如行

名月とまらぬハ只好を物しとるる力とまらぬとものまらぬの如くは
うも時節よりよして哀ををしとるるまらぬ

ものゝ心根とらん 月見夜 露沾

花に心のまらぬもの力に心のまらぬものまらぬものまらぬものまらぬもの
この力にまらぬものまらぬものまらぬものまらぬものまらぬもの

ふもつあらしは 智月

ふもつあらしは天より下の日ありのふもつあらしは天より下の日あり
ふもつあらしは天より下の日ありのふもつあらしは天より下の日あり

名月や長夜の陰をく 行 闇指

名月のほろほろとまらぬものまらぬものまらぬものまらぬものまらぬもの
名月のほろほろとまらぬものまらぬものまらぬものまらぬものまらぬもの

叻力や更料よのまらぬ 涼葉

世にまらぬくじや月の名所のく我やその月をまらぬくじや月の名所のく
あつこの更料のまらぬくじや月の名所のく我やその月をまらぬくじや月の名所のく

中切の利あるは 月見夜 配力

柳の名の五助と共なる月見式 如貞

山鳥のちつと庭あや侍の月 宗比

名方や里のよいのまゝはま 本枝

場を店て月見あらうや 丹延 機 利合

明月やききがまきき女中方 丹楓

名月やゆもじろりた 萩の夜 野萩

斗ももひらふよよいねじや何しじろりぬたをあふく、行来も志
月陰之群を見えるへきものちまを女のまのかしき、たよ月をるん佳
境ちやふるん

ルけまいしねのたけか、程推しさゝふものやと

飛入の若るるを赤目見式 正秀

おすしそそおあさくれいよい、さ、しそこんり、うんしんを
まうちうこ

淡川のなるとは田をくらして

舟川のたかあ、月をえん 丈艸

おるるまきらの月をるるら、い、ま、ねと、幸あおさか、たれい
舟川のかた隅て月をるるら、あ、ら、し、と

侍の月の月を、や、定花掃景挑

お掃がき、い、い、もの、や、の、侍、を、と、十五、あ、と、り、を、る、る、ら、う、ち、り
りこのし、い、い、もの、や、と、あ、い

家子三老女もよこ、い、い、の、お、父、母、監、の
秘して、侍、く、侍、り、し、を、思、ひ、わ、て

扶捨を、園、子、の、は、ら、や、ら、ふ、の、活、園

うもすそ山のかげをえんそくわのちをばりしこのあつた
印よりうしてまぬの月をえんばりし

露がきて月入あまや堤のやね 馬寛

塚のやみのぬゆいしそりかかむの月をえんばりし

昔がかつし月まねあま 桐乃 里東

若桂の秋とあかりし月まねあまの月をえんばりし

月かや海の音は長廊下 牧童

月をえ海つきをえんそくわのちをばりし

津川の末五中松より月をえんばりし

川上とと折川下や月の友 芭蕉

海川のまねえあつても月をえんばりし

十六歌いまづりし月をえんばりし

藤とつまね山と成しし月をえんばりし

いさよしいハ言ふはなるまらまらいさよしいやうそもの花ハツまらまら
猿 猿

てみるやうしや月いづらうをばりしそもの花ハツまらまらいさよしいやうそもの花ハツまらまら

七女

更行や水田の上のあまの川 惟然

水田の上へふまきりしと天の川うついで月いやくそゆをえんばりし

星をえんばりし朝のしん 涼葉

鶴のほしとこがすまらまらいさよしいやうそもの花ハツまらまら

船形の雲あゆむやねの船 東潮

船あつのしんばらうそゆをえんばりし

あまをえんばりし月をえんばりし 沾圃

七夕の年よつた夜あまをえんばりし

ついでに... やさしく... 地つう... 神... ありて... ありて... ありて...

朝風や芭蕉 姫の園もちり 七州

夜歸人あはれ... 園もちり... 七州... ありて... ありて... ありて...

立秋

粟ぬのや庭より片よる今朝の秋 露川

事もあり... やさしく... 田家の... 秋ありぬ... ありて... ありて... ありて...

秋まや中よ吹るく雲は山峯 左次

秋まよ... 中よ吹る... 雲は山峯... ありて... ありて... ありて...

秋草

朝露の花透通に 枯樵が 柳梅

朝露の花... 透通に... 枯樵が... 柳梅... ありて... ありて... ありて...

細工もめりぬ 拵授のついでに 隨女

拵授のついでに... ありて... ありて... ありて...

女郎花ねいぬ馬首の姿は 濁子

女郎花... ねいぬ... 馬首の姿は... 濁子... ありて... ありて... ありて...

女郎花移坂の杖はかぬ馬首

川柳のか... 絵双紙... 女郎花... 馬首... ありて... ありて... ありて...

とあり... ありて... ありて... ありて... ありて...

ねと... ありて... ありて... ありて... ありて...

のすま... ありて... ありて... ありて... ありて...

へて... ありて... ありて... ありて... ありて...

おのつら草の志あるを地かこのふ 圃燕

自ハ已随テオハツカラト書クヘシ志あるハ志ある方言志あるハ志ある
地分ハ吹カケテも草ハ其ノ志ある一を志あるハ志あるハ志あるハ志ある

ふんそらや地分をむらふと 九節

花やうらふ化レルハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志ある

あめつて未の海行へ地分ハ 猿籠

此方の風のぬけて一歩ハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志ある

稲妻

しづく居て留まぬまじ稲の海 一東

稲の海ハいづれも一東ハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志ある

稲妻や雲をなする海の上 宗比

志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志ある

明日のや稲つももる雲の端 玉芳

下五物ハ仙道新ハ稲妻ハ雲の端へももるとハ一東の仙道のハ

いづれもや仙道の方行く五位の雲色蕉

仙道のハ仙道のハ仙道のハ仙道のハ仙道のハ仙道のハ仙道のハ仙道の

木實 附菌

園栗の志落るを石の志 為有

園栗の志落るを石の志ハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志ある

炭焼る炭抄たの志 去虎

炭焼る炭抄たの志ハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志ある

秋空や日和らり掃のり 洒堂

秋空や日和らり掃のりハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志ある

あまの志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志あるハ志ある

此ふと志あるをもち 櫻の志 重翠

教子の言ははらうことく恨むくかゝあぬいひらへ長し秋の教をい
事いよしてくはひらへに恨むく長きも又いし事うことせし

行秋やあをじうけたる粟のいろ 芭蕉

粟のつらうとてかろくも果ねいよをじうけて自滅を待ルくあま
腹たりのりあましくは我のたをてあましく古言辨子くつこの粟刺より

雑秋

五六十海老つかやそ 般了 之道

百々の安一夕の難しをてつる海老は五六十の海老をついやりた
あり古言辨子買ひいゆつひえしてや行のたはひらへ

粟かゝの家はん 松の中 圃友

松樹森と中に中の家をゆつて世のののりうきつあはんを
あはれ 雑書のなまをてつるおさひ 畦上

残るゆやふれつる秋の雨 口友

もはらうあくまのさかやふれはる中つらひいふといつるあは
るいあくひやしやう又まつらうくおさひ

方ふらひいふ話のさかや 鞆が 萩子

鞆の矢をもちつる山野に松狼あまへし。鞆 三才回會、或曰謂盛
矢室名、宇豆空庵義履堂名徳以承徳義

更らねや稲こゝ家の笑もろ 万字

農家の賑いおさうつるあまへし。更らねや稲こゝ家の笑もろ
とこおさうつるあまへし

柳の毛ふら焼みそのはん 宗波

葉川の境界の毛きをいひて名刺の筆と白服にたるう見らる人
本間主馬の筆は鬚骨をもめ茶藨をかき入て

能するあを画て舞臺の空まかけあまへし

生前の角りあまへし。このあまへしは殊あま

んやらの鬚髯を梳として髪をまうつるをま

重陽の宴を神無月の夕ふまきけ侍る夏ハ

具頃九月九日花さきすつまあめくくししやらひし筆花

いく時即重陽といるころようかつハ

展重陽のためあましもありねハおりりのこ

秋菊を詠して人をすめるころようかつハ

筆の香や庭の秋の履の底 芭蕉

筆の香のいづくはしきし陰者の庭のものかくりしぬ月を識るあついで
切れはら履の底といふまををひめたるらんあついで

柚の色や詠あつてはる筆の毛 具角

中七の作に柚の色は詠ゆきくの上の筆のたりよあつてはる毛を
を仙んとしてかくそあやをよあつて

筆の筆味あつてはる境や萩の中 桃隣

今持の庭中の筆の筆味あつてはる境や萩の中

筆の筆味あつてはる境や萩の中 桃隣

筆の筆の味あつてはる境や萩の中 桃隣

筆の筆の味あつてはる境や萩の中 桃隣

何魚の如くはる筆の技 常良

筆の技あつてはる境や萩の中 桃隣

筆の筆味あつてはる境や萩の中 桃隣

筆の筆の味あつてはる境や萩の中 桃隣

筆の筆味あつてはる境や萩の中 桃隣

筆の筆味あつてはる境や萩の中 桃隣

今その集をまぬいておのつかぶあをを雪に
といへとも家ニ集あつて琴あしかけあはる
あはひやとて人見竹洞老人素琴を送る
よ利是を父子し是を朝うしてあるはとあまき
は結きあるは風よあふへあつきて自ららる
うるしをぬ琴や化るぬ集の友 素堂

草 附本
又あれのさびしき子時あひぬ人のすめるはれは
いりあるはあれのいあくはあまきぬあまき衣あしとそ

水仙や珠堀をまき日北透る 曲翠

形白清く咲やあおかちの水仙花 氷固

水仙の花のみるもや紫の葉 惟慈

山家集の題は相ひふ

一露もこぼさぬ集の氷の形 とき浅

山茶花は元より開く帰る花 車庸

冬梅のいさふあつや身の上 土芳

中七のしつろふはつに枯れし鳥の鳴きもかぐるこさし〜

山茶花も落さずや雪のちりり掃 露生

山茶花も冬枯れしうても〜

木葉 附冬枯 風

おといふし木の多きうねや星の教 沾徳

空のまはるはも四季のき〜

早さへて江の鮎いりむさあ多あは 露沾

早さえる秋江の中を〜

冬川や木の多ふに黒き山石の 削 惟然

あゆめたる冬川のと〜

繁よりし早さ〜

木の多きをふあ〜

本柳坊家此の産を多つねて

もいぢり〜先あるるる 産多ふは 一 道

いづ〜くもさ〜らぬはよ産もの〜

枯れて、おおまぢひや女郎花 杉風

女郎花は〜若や〜ある右に枯〜

牛の行く道は枯れは〜 飛 醉

の〜く〜牛の〜行を〜

冬枯れ去年来り〜 乃 龍

雪本の枯れ〜

雪の枯れ〜

雪吹をいそいで雪垣を築ふにその雪は三日の景物ありておどめ人
よりあつた雪をよめるのやとていふあり

ふる川子も雪鞋もあつたやりの雪 支考

初雪のあつた十分の雪の化はぬ雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪

片雪や雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪 圃吟

片雪はうらをなすぬ雪のそのあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪
る形もへそ雪の雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪
は月日のおおきく雪の雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪
油割のあつた雪の雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪
けい依り入る雪の雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪

思ひの雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪 文筆

陰者の雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪
るへ日投の雪の見も期しころころあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪
ろして至極かやろし

髪刺は降り来る雪の比良の山 陽和

一山を丸く雪の降かすはるを狂言のあつた雪のあつた雪のあつた雪

伊加夫大和の雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪 配力

伊加夫大和の雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪
を花の一雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪

神樂

秋神も生蓮も冷き雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪 史邦

ささかえ入るやうにかく雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪

鈴のあつた雪

食時やかあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪 路草

時節のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪
のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪

鈴のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪 馬寛

貴女もいそいで雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪
あつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪のあつた雪

せねしうらおのかあしや土流 圃仙
土流あふてはうらふあけいさぬうあかいあうらうのやよふあけい
かよりあてけいあけいさぬう

火燈より行時のおあが 雪草

山陰や猿あ尻振る冬日向 川谷

組扱より人卷の根のまきさし 沾圃

策外や久々に新のおきし備 杉風

上と同く人事の福を冬梅の体あけい衣あけい

秋教之部

附 追善 哀傷

涅槃

涅槃像あき表具も目よたに 沾圃

きく秋教の難あきをあけい美き表具も月つうあきと之の涅槃會二月十五日周の昭王二十四年四月八日秋尊誕生之入滅の周の穆王五十二年の當年七十九の周の子ついで正月リス志うら今の二月四月あきと之の説か非之印度の一ヶ月の中國の二十日之昭設あき略し

福もん会や敵手会をる縁教の音 芭蕉

若きものハお集の心うてき院よりまかれと老のまハ仏のあきあきみそ

山寺や猫守りたる福もん像 不撤

分ま福のまきとを志まや福もん像 山崎

灌佛

○灌仏浴仏生會産花會仏産湯其水五香水凡今日諸寺院灌仏会を終す諸品

家いふ杖の志は髪の首基あり 芭蕉

我が先行もあらずたまよしあわけを旧家まわつてつるれはこそいの子
そやとしかかふもさあふ髪をうけて子眠かくのこころは首基まわつ
るあはれなこころ

悼少年 二句

おれもや林木の若しおれも 惟光

おれも子もさやあはれなこころさうさうついでにみわの秋多ハ佛並よ
あはれなこころさあはれなこころさうさうついでにみわの秋多ハ佛並よ
ふんとあり又海月ハ大人又長とあり

具親をまわつぬその子ハ秋の風 支考

具親をまわつてその子ハ秋の風とありぬとこ子も先かきか親心ハ人なもつてあ
らふ秋風の物を殺しあはれなこころさうさうついでにみわの秋多ハ佛並よ
ふくもあはれなこころ

おまわりの龍口まよ詩て

首のゆハ稲葉のする其時ハ 木節

日蓮上人の首のゆハ稲葉のする其時ハとありぬとこ子も先かきか親心ハ人なもつてあ
らふ秋風の物を殺しあはれなこころさうさうついでにみわの秋多ハ佛並よ
ふくもあはれなこころ

おまわりの龍口まよ詩て

おまわりの龍口まよ詩て

佛影講

おまわりの龍口まよ詩て

おまわりの龍口まよ詩て

睡ハ

おまわりの龍口まよ詩て

おまわりの龍口まよ詩て

おまわりの龍口まよ詩て

天台の章安大師の法あり此人権化の人にして吾輩の大乗の信心あり
此大師の法を末こそてかくりよめ

雑題

洛東の真如堂はして善光寺如來開帳の時

涼しくも野山よりつる念佛が 去来

佛の利益のわいらして此山も念仏の心をもすしと好む
うり極楽世界を涼くまふありに彼をわらひ念をほろこ

有るもあやと二つさうらみ子の花 智月

あしの花のちりあやといせんとしてあやもあつたる人の命も
花のわらわらえありあはれもさぬもさうらみあはれもさ
んてまをみりあはれもさうらみ

ルし柳やちりあはれもさうらみ佛在世 乙州

ルし柳をさうらみ極楽をさうらみ仏在世をさうらみ

もあふ川新開して富士まで 重翠

川越しい川の安ありあはれも山もあはれもさうらみ川越の
山人よ山のあはれを河をさうらみさうらみさうらみさうら
富士詣六月一日より廿日一富士垢離は五月廿五日より
富士の行人毎日河辺よみて垢離をすす垢離をすす垢離を
すす垢離をすす垢離をすす垢離をすす垢離をすす垢離をす

あまのつらさうらみさうらみさうらみ 夏念仏 野坂

食堂の雀啼きあはれもさうらみ 支考

あまのつらさうらみさうらみさうらみ

旅之部

送別

元禄七年の夜を紙菰の別を見送るて

麦ぬる子麻屋のみきの別が 荷分

其時のまゝを他りてさふらひのまぬののぬらりの上をゆくて牛
さあき又送るいやくとのまなば抄ののぬらやサナルとよあをいあ

別るや柳喰ふら坂の上 惟悲

惟悲坊のまゝの傍裏して金念のふりあう勝たさうありあし

許六の本曾海もおもむ時

旅人の心も似よ権の花 芭蕉

権ハ大樹詩六ハ比す花ハ風のしるぬらうさて許六ハ用うて旅をさるる
へしをもよりけ人傳傳うて旅のありしをまよせれそこをさぬい女士と旅
のありれをまぬ旅人のんまうてんまうて

留別

洛の惟悲り宅より古江に帰る時

嵐ともおまきの世子をまわがし見 文州

嵐ともい文州自らをさす夫きは就きまうあしたよりよまをま
テの世をわしこのしるるらん流あり

船の子の志は魚を送る 別るま 芭蕉

送るま別るまはもとこ一天地るまていし舟中の魚のわしと

甲斐の身延は諸ふる時宇都の山切はかりて

今年よりて牛よのりく世身の海 木郎

夫はれハ牛あまよあうてあうてこん義のい其の山道あ争してたかり
ふかハ牛いさわそくてたもかゆのわとありけぬ故牛よのり

稲つらやうき世をぬる 鈴鹿山 教人

稲つまをまののりたててうき世をぬると他んり鈴鹿山のま
うていさあまの實のま

人まあついで多の柳や旅の宿 野徑

旅籠やを築きむるルキハ柳の宿をまやうまにあいとのいやく
もまあついで多の柳の宿のま

そのうみハ谷地あうらじハ夜礎 二羽

小坂砦をゆりて... 公羽とあり... 十国より小坂... 大名の存... 旅麻の...
小坂砦をゆりて... 公羽とあり... 十国より小坂... 大名の存... 旅麻の...
公羽とあり... 十国より小坂... 大名の存... 旅麻の...
十国より小坂... 大名の存... 旅麻の...
大名の存... 旅麻の...
旅麻の...
よ...

くまの海

くろくろくよ茶あま川へぬを皇の旅 曾良

行脚の... 仁宗皇帝... 清の姓... つもくろく... 猿雉

本曾路の... 助のハ...

助のハ... 旅安 殺奪

川出... け旅安... よい...

煎つけて... 史邦

おひの...

回國の心... 漸く伊勢の國...

父且皇の扇... 秋涼... 呂丸

作事... の浦... 秋涼...

我藩... 旅の... 活圃

客中の... 何を...

常陸の國ありあけいしこふぶし行きてやと
り来ぬんとききよその夜ハたる事ありとて
宿をたさくふれに別時の朝の下よかま
りおして

椽をみる情や梅よ小豆粥 支考

さて椽の下をみる人の俗物ありにたえかぬありありあかぬまに梅を
見てお豆やゆをこくふれやうふ流白ふまの凡雅の心もちてこきし
○情の字こころは梅をみるこころやとて

その血や道ままふ花元 全

るのへまは焼ふたり花もこころの血の花は似たるこころを仙とて
ありぬるこころあり

元禄三年の冬粟津の草庵より武江へ
おもむくとて鳴田の駄塚本り家より

宿かりて岩をふのすかしくきん とき成

あましの凡流人ありこの時あるふるまうておのつうりうき
りいしを川くさるてこのしき色う我を宿をかくしてそしてまた我
よふをよますこころやと仙とて岩をふのすかしくきん

異本七部集の宿かりてのついでに右の如し

千鳥

聞あかてもさう汀やちきり足 貞徳

決浜かまかあやしのちきりかけ 徳元

唐中も行く千鳥の浦めりり 杉凡

浦あめて千鳥も鳴や船大工 宇古

赤も海ぬ銀夜史古し小ねちきり 新足

品川や塵をよみまて鳴子鳥	百丸
せりあや羽士やすめいさる千鳥	人角
目の驕収る雪のちとらひ	長文
鋤鉄のまいつらくきま千鳥	徳七
櫂柄の頭ゆき千や磯千鳥	凌秀
明かぬの静き念ヤソそちとら	金風
引込みちとらの声のゆゆき	和哉
千鳥ももなるの羽さこの里の妹	昨非
静なる中のこときいちとら	井泉
さいしとりの裏のうらやま	之白

更らぬの千鳥よおるく	月守
方象の影や心のか夜ちとら	柳水
いこのある方の家どやま	金聯

大本ノ奥書

猿猿義の芭蕉翁の一沘の書之何人の撰といふ
 変を考ふに翁遷化の後伊賀上野翁の兄松尾
 ありし許ふあり某懇望年を経て漸今歳の春本書を
 ありし書中式ハ墨けしあるいハ書入ホの

おほく侍るに草稿の書形をいふより一字をかへす
一行をあふゑめすしてその書具手跡をもて
直に板行をぬす物あり

元禄十一寅

五月吉日

かくかきとありき

みつや

社名 坊主



月七日

